

平成 28 年度 第一回学校教育相談研修会報告書

学校教育相談専門委員

御殿場西高等学校 齋藤創一

H28. 11. 8 <静岡県私学会館 5 階>

講 師 静岡大学 学術院 人文社会科学領域・教授 江口昌克氏

演 題 「家族へのアプローチ～アセスメントと介入」

参加者 30名

時 間 14:00～16:30

- ・あらためて「家族」を見直してみる。資料「家族機能測定尺度」をやってみて下さい。家族の「絆」と「柔軟性」のバランスが大事である。ほどほどの部分が良い。極端すぎる家族は問題が生じやすい。
遊離と無秩序の部分が多い家族を拡散家族といい、絆やルールがゆるく、簡単に外へ出て行ってしまうような家族である。
膠着と硬直の部分が多い家族を纏綿家族といい、親離れ・子離れが出来ない窮屈な家族となる。
- ・家族の機能は、状況によって変わってゆく。機能している家族は、強固なルールや役割がない。共有されている秘密がない。ユーモアのセンスがある。などの特徴がある。
逆に機能していない家族とは、強固なルールがあったり、家族に他人が入り込むことへの抵抗があったり、家族成員にプライバシーがない等の特徴がある。
- ・児童生徒の不適応問題の原因は、個人にある問題のほかに、三者以上の人間で構成される集団やシステムの構造そのものを捉える視点である「システム・アプローチ」にあることが多い。システム・アプローチとは、問題のきっかけが、なぜ増幅しているのか？説教や反省文では効果の上がない非行などがなぜ起きているのか？など、語られる内容にとらわれず、場や状況、前後関係などから読み解く。問題の背景に視点を置き、気がつくことである。
- ・なぜ思春期に問題が起きるのか？ ①親から自立への不安。②環境に溶け込もうとした時に何らかのトラブルに巻き込まれた場合。③環境に慣れようとする事からくる緊張や疲労からめげてしまう場合。以上の三点が主な原因として挙げられる。家族の危機(親の離婚や不仲など)がストレスとなり、家にいるだけで疲れてしまう。

- よく怒りが爆発する家族や冷たく愛のない家族、虐待があったり、比較や批判をされる家族などは、問題のある家族なのではなく、変えることの難しいルールやパターンが存在するという事に注目しなければならない。家族が問題なのではなく、変えられない環境に問題がある。関わりのパターンが固定化し、息苦しく窮屈な世界である。
- 学校や家族が個人と関わることで、問題が増幅される。この「問題増幅システム」を解決していくことにより、個人の問題が見えてくる。
- 齊藤万比古氏による不登校に関する治療・援助システムによると、一番大事なのは、環境要因への介入である。次に精神疾患の治療、発達障害に対応した環境設定、不登校下位分類による治療・支持法の選択、展開段階による介入姿勢の修正の順である。環境要因介入の中の環境の評価とは、家族要因(虐待はないか?・夫婦関係の質・家族史・家族内の病気、死去、離婚などのライフイベント)、学校要因(担任教師の姿勢・学校におけるストレスの量と質・不登校支援対策など)、地域環境(地域の児童支援対策・非行集団の有無・地域の閉鎖性など)の3つである。不登校などの事例が生じたら、家族・学校・地域の環境の中から少しずつ情報を集めていくことが重要である。特に親の成育歴による、自分の育ってきた課程を押しついたり、偏った理想や願望により、子供に対して不適切な関わりをしていないだろうか?
- 家族システムには、開かれたシステムと閉じられたシステムがある。開放システムでは外部との情報のやりとりの中で、解決に繋がることがあるが、閉鎖システムだと情報のやりとりがなく、悪循環になりやすい。
- 解決への試みが作る悪循環とは、例えば、「親-早く帰って来なさい」「子-まだ遊びたい」「親-5時までには帰って来なさい」「子-皆は6時なのに」「親-ルールです。」「子-いやだ」という風に直線的な考えによってその原因を特定し、それを取り除くことが問題解決に繋がると考えがちだから、それが悪循環となる。
他の例として「子-あれ買って」「親-ダメです。父さん叱って」「子-泣いてわめく」「周りがジロジロ見る」「親-後で叱るから安いもの買っておけ」の繰り返し=悪循環
- 家族療法では、悪循環が家族には見えにくいいため、カウンセラーはIPをめぐる周囲の人々の円環的相互作用を観察して、その悪循環のどこが変化すればシステムの健全な相互作用が回復するかを見出そうとする。

- ・ IP とは、家族システムの中で、たまたま問題や症状を呈した人の事。家族システムや家族を取り巻く生態システムの機能不全を示している人。
- ・ 問題の解決方法に、今までと違った方法はないのか?上から物事を見るのではなく、同じ立場で物事を見る事が大事である。そうしないとわからないことがある。
- ・ 家族が問題なのではなく、家族のシステムを変えていくチャンスである。

・ 構造モデル① サブシステム

夫婦サブシステムは、社会的に認められた夫および妻という二者関係を通じての個々の成長と社会の期待に応えるという機能のこと。親子サブシステムは、基本的機能は養育と責任ある成人モデルの提供である。また、同胞サブシステムの基本的機能は競争や協力といった体験を通じて、子供が社会化するために必要な仲間集団への適応を促し、両親との世代間境界を強固にすることである。日本の場合は、親子サブシステムが強く、夫婦サブシステムが弱い。親子の絆の強すぎる関係(障害児とその親の関係など)

構造モデル② 境界(バウンダリー)

家族全体及び家族内のサブシステムの目に見えない輪郭。境界が明確でなく、サブシステム外の人間に境界が侵された場合、システムが機能不全になり、問題が生じることがある。

構造モデル③ 連合

夫婦連合のある安定した家族関係が望ましい。父・母二者の関係が不安定だと、第三者を取り込んで、関係を安定させようとする。

- ・ 家族システムへのアプローチは、個人の変化が及ぼす周囲の変化、またそれが及ぼす個人の変化をアプローチする。合同家族面接では、家族全体を支援しながらのアプローチ。家族システムにしても個人システムとしても変化が統合的に進むことを心がける。
- ・ 介入のための技法として、リフレーミングがある。私たちが出来事に対して抱くある状況がクライアントによって経験された情緒的文脈(フレーム)を取り替えることにより、その状況に固着していた意味を根本的に変更すること。そこから新しい動きが導かれ、行き詰まりの打開が図られる。ポイントの例として、「夫が子供に厳しすぎたから」というのを「自分が嫌われてでも子供をしつけようとしたのですね」と言い替える。また、「妻のいう事が全く理解できません」これを「5パーセントなら理解できますか?」に変えるなど。

- 最後に、原因探しではなく、うまくいっていることに焦点を当てて、そこから問題解決を見出してゆく事が大事。決して駄目な家族だと考えずにアプローチして欲しい。親と関わる時は、複数の教員で関わる方がよい。対立の関係をどう作らずに進めるかが大事である。という事で話をまとめ、講義が終了した。
- その後、質疑応答に入りましたが、質問はありませんでした。